

寺院遺蹟についての調査報告

佐 藤 悅 成

はじめに

平成三年三月一八日より四月八日までの二一日間、本学文学部鎌田茂雄教授を研究代表者とする「国際学術研究」（文部省科学研究助成費による学術調査）に研究分担者として参加し、中国陝西省内において仏教の伝播経路に關して現地踏査を行つた。筆者の調査担当項目は、「寺院遺蹟の研究」であり、以下に記す報告は、当該調査の途上で考察した破仏の問題と、中国の仏教寺院の現状を中心として記したものである。

中国の仏教遺蹟の研究については、戦前になされた常盤大定博士の諸論考が知られているが、拙稿の後半には調査報告についての調査報告（佐藤）

地域の一部寺院の現状について記した。

同じく研究分担者として参加した教養部岡島秀隆講師は「仏塔（浮屠）」を中心として調査を行つた。伽藍は瓦礫と化して昔日の面影を留めない寺院趾においても、仏塔のみ建在することも多く、例えば香積寺のごとく、塔が残存していたため伽藍も復興した例は少なくない。また、慈恩寺や薦福寺のごとく、大雁塔・小雁塔として、寺名よりも塔名の俗称がよく知られている場合もある。上記諸寺の論考については岡島先生の報告を参照されたい。

調査の基点を西安市西北大学内の西北賓館に置いたが、陽曆三月の西安は、白楽天が記す陰曆の三月よりも少々肌寒く、春の盛りであった。行程の中で三月三一日に慈恩寺

寺院遺蹟についての調査報告（佐藤）

を參觀したことは、白樂天が「三月三十日慈恩寺に題す」と記した春の詩を想起させるに充分であつた。

三月三十日　題慈恩寺

慈恩春色今朝尽　尽日徘徊倚寺門

惆帳春帰留不得　紫藤花下漸黃昏

現在の西安は隋・唐の長安城に比べれば、その規模は六分の一といわれる。明代に縮小され、名称も西安と改められたのであるが、直接の原因は、唐末の動乱に際して灰燼に帰したことにより、以後再び国都となることはなかつた。

唐末に哀帝から禅譲の形で国を奪つた宣武節度使朱全忠は、後梁を建国するにあたつて都を汴京（開封）に定め、東に移るに際して長安を破壊し、宮・府・民家を解体して木材を渭水に浮かべ運び去つたといわれる。その時でも大雁塔は残つたといわれるから、塔とは古来破壊し難いものといえる。

唐代の長安城は城壁四〇キロに及ばんとしていたが、明代に造営された長安城は僅か六キロといわれる。その意味では、現在の西安に唐代の長安のイメージを重ねることは誤りといえよう。

また、漢代の長安城は現在の西安よりも北西の渭水により、東京（洛陽）に対して西京と呼ばれていた。漢の長安から渭水を渡つた対岸が秦の咸陽城であり、唐代には西に向かう人々は、長安を出て咸陽で家族・友人と別れを惜しんだといわれる。王維が友人の元二の旅立ちを送つた「渭城の朝雨」とはこの地を指している。

隋王朝は天下を統一すると、北周の首都長安を徹底的に破壊してしまい、漢以来の長安は滅亡した。そして改めて竜首原と称されていた丘陵地帯に新たに都を建設して遷つたのである。「六坡」ということばは、長安城内に六の丘陵があつたことを示しているが、空海ゆかりの青龍寺趾が丘上にあることをみれば意味が解るし、また、同寺が旧長安城延興門脇の新昌坊に位置していたことを考えれば、現在の西安との規模の違いが判明するであろう。

隋の始祖文帝（楊堅）は北周の外戚であつた立場を利用して王朝を篡奪した。自己的地位を不動のものとするために旧来の全てを消去しようとしたのであり、その一環として長安の破壊が行われたのであろう。しかし、南北を統一した隋王朝が三八年の短命政権で終つたのも、破壊に代表

される強引な政策に原因があつたといえる。前王朝一族の

惨殺に始まり、八百年の都長安の破壊と新都大興城の性急

な建設、国力不相応の高句麗遠征と重なつて命脈は尽きた。

煬帝は殺されて孫の楊侑が李淵（唐高祖）に禅譲したのである。

隋代には長安の名称は用いられず、「大興城」が用いら

れ、唐になつて初期は単に「京城」と称した。後に「西京」と改められ、また「中京」ともなしたが、再び西京を経て

「上都」と呼称した。二転三転の変更はあつたものの、唐代には長安という名は遂に正式に用いられるることはなかつた。

しかし、市井の人々の間では唐代もこの地を長安と呼んだ。その理由は、長安城中央の朱雀門を境として西は長安県、東は万年県に属しているところから、漢の都長安以来の名称を用いたのである。

長安について簡略に記したが、今回の調査によつてこれ迄文献に依つて知り得ていた多くの事柄に証明が与えられたようと思う。同様に、各寺院についても現地を踏査して納得のゆく点も幾多あつた。その意味で、陝西省の調査は

筆者に非常に有益であつた。

調査にお誘い下さった鎌田先生に厚くお礼申し上げる。

池田魯参先生には、調査期間中多くのご教示を頂戴した。

岡島秀隆先生には雑務のお手伝いもお願いした。併せてお

礼申し上げる。

また、中国側研究者としてご同行いただいた中国社会科学院世界宗教研究所の楊會文先生、陝西省社会科学院歴史研究所の暢耀先生、陳景富先生、王亞榮先生には多くの示唆を戴くことができた。深く感謝申し上げる。

更に、中国社会科学院歴史研究所博士生の高洪先生には通訳としてご参加を願つた。調査が無事円成したのも高洪先生に負うところが大きいと感謝している。

そのほか、各地で多くの方々にお世話をいただいた。記して感謝の意を表す。

中国仏教と破仏

破仏（廢仏）といえば、中国では「三武一宗の法難」といわれる、前後四度に渡る宗教弾圧を指している。

最初の法難は、北魏太武帝により太平真君七年（四四六）

寺院遺蹟についての調査報告（佐藤）

に行われた廃仏政策である。華北を統一したかにみえた前秦の苻堅は、南進に失敗して自滅し、苻堅が唱導した諸部族融和政策の元に連合していた諸族は再び独自の政権を分立させることになった。その中に鮮卑拓跋部の北魏があつた。三代目皇帝太武帝の時代までに華北をほぼ統一した北魏は、華南の宋王朝と天下を二分する勢力となつたが、西方討伐の過程で、それまで以上に仏教が国内に弘まる結果を招いていた。歴代の皇帝は仏教を保護し、都の平城周辺にも多くの仏寺が建立された。しかし、北魏の重臣であり漢族の崔浩は仏教を嫌い、道士の冠謙之を宮中に入れ、皇帝を道教信者となすことに成功した。その結果、元号を太平真君とするなど、太武帝の心は仏教排斥に大きく傾いた。

太武帝の時代は、華北統一を達成するための兵士の補充、生産の充実が急務という社会情勢にあつた。そのような中で、直接生産に従事せず、兵役にも就くことのない僧侶の存在は、仏教々団が勢力を拡大すればするほど、為政者にとってはどこかで歯止めをかけなくてはならない問題となつていていたのである。また、戦争を嫌い、逃避として教団に加わる者の増加もあって僧侶の質は低下し、歴代皇帝の帰

依といふ甘えに慣れた仏教々団の側に、墮落の傾向が見え始めていたことも、事態を悪い方へ動かした。

廃仏の第一段階として、太延四年（四三八）には沙門を五〇歳以上の者に限定する詔が発布された。次いで翌々年には元号を太平真君と改め、その七年に徹底した廃仏政策を実行するに至つたのである。

仏教に対して過酷な処断が下された直接の端緒は蓋呂の反乱にあつたと伝えられる。その鎮圧に際して寺院に入つた国軍は、そこで僧侶の飲酒と秘匿された武器を発見したといわれる。崔浩の策謀ともいえるが、その結果、反乱との関係を疑われて仏教弾圧は始まつた。長安の僧侶は全て殺され、伽藍・經典・仏像は焼き尽くされた。この事態に驚愕したのは仏教側のみではなく、冠謙之はじめ道教側も弾圧反対に回つたという。それは、政治的理由による宗教弾圧が前例となれば、何時その矛先が道教に向けられるかわからないと恐れたからにほかならない。

太武帝は平城でも長安同様の弾圧を行うよう太子の晃に命じたが、晃は仏教を篤く敬い、詔書の発表を遅らせて仏教側に逃げる余裕を与えたが、寺院は破壊せざるを得なか

つた。

その後、太武帝は宦官の宗愛に殺され、その死をもって廢仏は止んだ。文成帝となつた拓跋濬は、先帝の禁制を解くとともに仏教保護政策を探つて曇曜を沙門統に任じ、曇曜は五帝の供養として雲崗に石窟を造営したのである。北魏が廢仏を経て再び仏教国化していくことの象徴が雲崗石窟であつたといえる。

第一回の破仏は上記のごとき状況のもとで断行されたのであるが、第二回目の北周武帝による破仏にも類似した原因を見出すことができる。

当時の仏教保護とは、国費による寺院・仏塔（浮屠）の創建であり、僧侶への供養であつたから、元を辿れば国民の税金によるものといえた。同時に僧侶は税・夫役・兵役を免除されたのであるから、形だけの僧侶が増加し、真摯な修行者を上回つたとしても、それは当然の帰結といえる。

北周においても僧侶の増加は社会問題となり、武帝は六年間の準備期間を設けて仏教弾圧の方策を研究し、建徳三年（五七四）、破仏を断行した。一説には国内三百万人の僧尼が還俗させられ、青年僧は軍に編入されたほか、全て

が生産活動に従事させられたといわれる。

政権による過剰な保護は僧尼の宗教者としての自覚を失わせ、仏教々団としての自浄作用は機能することなく墮落したのである。その点に廢仏を導き出す原因があつたといえる。

次に、第三回目にある、唐朝武帝による「会昌の破仏」について簡見する。

会昌二年（八四二）から開始され、同五年に頂点に達した大規模な破仏の原因是、第一に経済効率を優先させて、國を運営しようとする高級官吏の儒家思想があり、第二には為政者に仏教々団の墮落是正という大義名分を与えてしまつた点が挙げられる。更に、第三には国粹主義といつてもよい官僚の中華思想と、道教側からの廢仏工作が複合したこととも挙げられる。

しかし、仏教墮落の原因是政権側にもあつたといわねばならない。安史の乱に対する軍事費用の不足を「度牒」を大量に発行することでも補おうとしたのであるから、長期的にみれば政府は自身の首を締めているのと同じことであった。度牒の売買益で短期的に国庫は增收となつたとしても、納

寺院遺蹟についての調査報告（佐藤）

税免除、兵・夫役も免除される僧の増加は、いずれ財政を圧迫することは明白であつたといえよう。

唐王朝はその最初から老子を遠祖と自称したのであるから、「道先仏後」の立場を採ってきた。それが則天武后的時代に逆転して「仏先道後」となり、憲宗の代には宮中で仏舎利供養の法会までも営まれた。この法会催行に反対したのが詩人として知られる刑部侍郎の韓愈であつたが、帝の逆鱗に解れたことにより広東潮州へ配流となってしまった。韓愈による反対の理由は、仏教が中国固有の宗教ではないという点にあつた。これは北魏の崔浩と同じ立場といえ、中華思想が極端な形で排外思想として現れたものであるが、崔浩の場合は異民族に仕える漢族としての自負がそのようにしわしめたのであろうし、韓愈の場合は安史の乱以後、翳の見え始めてきた唐王朝再建への焦りがあつたともいえる。

官吏のこの立場と融和を計ろうとした例を大慧宗杲に見ることがができるのではないであろうか。大慧の時代は既に首都開封を放棄して杭州を行在となしたもの、北の地域回復は望めないまま不安を内包した繁榮を続けていた頃でもある。高級官僚と親交のある大慧には社会の状況が把握を借りなくてはならないほど唐の国力は脆弱になっていた。加えて国内でも辺境の節度使が自立を企てて割拠する事態にも悩んでいたのである。いうなれば、大唐帝国は王朝の

再建と国内秩序の回復を成し得ぬまま国粹主義へと転落したともいえよう。

この立場は官吏が科挙により登用される限り無くなることはない。儒学の知識が要求される登用試験を経た官吏は、必然的に国をいかに上手く運営するかという国家経営こそが最大の関心事となる。その視点からすれば、生産に従事しない僧侶・道士は官吏にとって憎むべき存在となる。経済を発展させ、国力を充実させる基盤となる労働力に数えることのできない宗教者は、常に官吏にとって不愉快な存在であったものの、教団の綱規が保たれ、宗教を民衆が望む以上は認めざるを得なかつたといえよう。

眼を向けたのであろう。しかし、その社会を視野に入れた

大慧の仏法こそが否定されるべき姿だと道元禅師はいう。

動乱の時代を背景とした試みではあった。社会に迎合した禅の限界に大慧自身は気付きながらも窺余の一策であったといえよう。

ところで、武宗は道士の趙帰真を重用したが、道教は麟徳殿で行われた仏教との対論に敗北を喫した。緻密な理論で構成された仏教思想の前に道教は敵ではなく、論破されたことで却って道教側は危機感を募らせたといつてよい。

宰相李徳裕は、武宗の道教への傾頭を危惧の念で見ていたと思われるが、儒学教育を受けた者として、また現実を直視すべき政治家として潜在的に反仏教感情を持っていたためであろう、道教から武宗に働きかけられた破仏に反対をしなかつた。

会昌の破仏は「三武一宗の法難」の中でも最も規模が大きく、仏教側の受けた打撃は計り知れなかつた。著名な禅僧も多くは山中に逃れたり、一時的に世俗の中に混れ入んだりして難を避けた。仏教側の被害状況については、円仁の『入唐求法巡礼行記』にも記されている。興味深いこと

に、円仁の記録には鎮州・幽州・魏州・潞州の四節度使は破仏に反対の立場を表明したことが記されている。円仁の行実についてはE・ライシャワー博士の優れた研究が残されているので参照されたい。

会昌五年に廃された仏閣は四千六百、蘭若（庵・私寺）は四万、還俗させられた僧尼は二六万余人にのぼつてゐる。また、寺領であつた田畠数千万頃を没収し、寺院の奴婢十五万人も官に帰属となつた。更に、金銅仏・梵鐘は熔かして銅錢の鋳造に充てられた。仏教と同様な弾圧を、祆教（ゾロアスター教）、マニ教、景教（キリスト教ネストリウス派）も受け、多数の僧がやはり還俗させられた。

しかし、武宗のこの破仏は決して趙帰真に唆かされたためだけとはいえない。なぜなら、既に会昌二年（八四二）の段階で不良僧尼の度牒を抹消して還俗させていたからである。この年に罰せられた僧尼は三千四百余人大つたと伝えられるから、仏教側の墮落を是正したい考えが武帝にあつたことを示している。この段階で仏教側が反省し、自ら規矩の確立とその遵守を表明して、宗教者の原点に立ち戻ればその後の展開は様相を変えていたかも知れない。

寺院遺蹟についての調査報告（佐藤）

会昌二年のこの事件は破仏への前兆といえるから、從来いわれているように「急に天下に詔して」破仏を断行したとはいえない。北周の武帝と同様に、事前調査が行われるなど相当な準備期間があつたとみるのが妥当であろう。

ただ、武宗はこの破仏により仏教を完全に消滅させてしまう意図は持つていなかつた。長安（上都）には右街に慈恩寺・薦福寺、左街に西明寺・莊嚴寺の四箇寺を残し、洛陽（東都）にも同じく四箇寺を残し、各州にも僅かづつ（各一箇寺）残したからである。

『資治通鑑』唐紀六三には、先の内容を記した後、寺格を上・中・下の三等に分類し、上等には二〇人、中等には一〇人、下等には五人の僧尼を留めたと記す。

また、『旧唐書』武宗本紀の会昌五年の記述にも同様な内容が記された後、「隸僧尼属主客」と続いている。「祠部」が国内の宗教を掌握する部署であるのに対し、「主客」は朝貢する諸国を掌る部署であるから、仏教の担当を祠部から主客に移したことは、先に韓愈が表したように、仏教を外蕃の宗教と位置付けたことを示している。

破仏を推進した武宗は会昌六年三月に崩じ、宣帝が即位

することにより廢仏令は取り消され、直ちに長安には八箇寺が増置された。

宰相李德裕は職を解かれて崖州（海南島）の司戸参軍に降格されて当地で死に、趙帰真は杖殺された。

長安の春を詩つた白楽天も会昌六年十月に寂したが、その死の直前に破仏は終息した。逸年になつて無残な仏教への弾圧を目あたりにした仏教信者にして詩人であり、官吏でもあつた白樂天は、仏教の回復を見ることはなかつたものの、まずは安堵のうちに死んだといえよう。

ところで、三武一宗の法難のごとく、表面化することはなかつたものの、唐の高祖李淵も廢仏を検討し、弾圧に着手しようとしている。唐が興つて間もない武徳九年（六二六）、李淵は仏教・道教廃止の詔を出し、両教を廢することを試みている。それは、太史令傅奕の仏教排斥の上疏を端緒として始まり、蕭瑀の反対を押し切つて開始されたが、詔には仏教のみではなく道教も処断の対象とされていた。

僧尼に与えられていた優遇措置は、同じく道士にも与えられており、李淵は道教に対しても快く思つていなかつたのである。

長安には寺院三箇寺、道觀二箇所、その他各州にそれぞれ一箇所を残して全てを廃する内容は、長安に四箇寺を残した会昌の破仏よりも重い処分といえる。

この詔が実行に移されていたなら武宗の破仏を上回る弾圧となつたであろうが、直後に起こった李世民のクーデターと、太宗としての即位により、詔そのものが廃されて実行はされなかつた。

『新唐書』高祖本紀には、四月の項に「浮屠・老子の法を廃す」とあるが、六月の項には「秦王世民、皇太子建成と齊王元吉を殺す。大赦して、浮屠・老子の法を復す」とある。クーデター当日に急いで仏・道両教廃止政策を撤回したことには他の原因があるのであろうか。ともあれ、仏教は危いところで難を逃れたというべきであろう。

四度目の破仏は、後周世宗の繁榮が行つてゐる。後周は唐末五代最後の王朝である。

内政の充実、経済の振興に腐心した世宗は、動乱の世に兵役を逃れた者、納税免除を求めて僧形をなした者を還俗させて生産に従事させた。

上記、四度に渡る破仏について記したが、その眞の被害

者は仏法により眞の自己を確立せんとしていた真摯な修行僧であり、仏法の思想体系を誠実に学んでいた学僧といえるであろう。破仏により仏教の学問系統は断絶し、継承され来つた文化も灰塵に帰した。

それは、北周の廢仏に際して北朝の僧侶は大挙して南朝に逃れ、学派としての北方の地論宗が途絶えたことが挙げられる。廢仏後、南朝で盛んであつた摂論宗が北でも勢力を拡大するのは顕著な例である。

また、造仏様式としての「交脚」菩薩像が、インド・中国にその姿を残しながら、朝鮮半島・日本には伝わらず、僅かな期間で消滅した原因に破仏を擧げることができるのではないだろうか。

僧侶は逃れたものの仏像は破壊されて技法は断絶し、破仏後は異なる地域の様式が一挙に流入することで造仏形態が一挙に変化してしまつたとも考えられる。北朝で作られたものが、破仏を契機として衰退し、回復後は南朝の技法が主流となつて省られなくなつたとの推察が、地論宗と摂論宗の動向から考えられるのである。



草堂寺小山門

(1) 草 堂 寺

西安より西南に約三〇キロ、戸県城の東南約二〇キロに草堂寺は位置する。背後の山々は終南山に連なり、圭峰山の端整な姿を真近に観ることができる。

寺院建立の沿革については不明な部分も多いが、後秦の姚興（三六六—四一六）が設けた逍遙園内の一堂宇をその起源とする説もある。『長安志』では、逍遙栖禪寺は県の東南にあると記し、更に、逍遙園即ち草堂寺であり、逍遙宮内の寺であるとも記す。

ここでは『重修建福禪院之記』（宋乾徳四年撰）にも記されるところの、逍遙の寺は羅什訳経の場所であり、宗密が疏を造った園であるとの記述に沿って記す。故に、草堂寺・栖禪寺・逍遙園は同一地の別称と判断する。

栖禪寺の名は、宗密が住した頃に用いられたと『陝西通史』はいう。また、西明閣も同一地を指すとする意見もみられるが、『歴代三宝記』には、姚興は羅什を西明閣及び逍遙園別館に招き入れたとの記述があり、西明閣は別の場所と考えるのが妥当であろう。

後秦弘始三年（四〇一）に羅什は長安に到着し、その後、姚興の求めに応じて逍遙宮内に移り住んだ。羅什の手による翻訳經典は九七部四二七巻に及び、訳經僧三千人がその作業を補助したと伝える。

現在の草堂寺には、羅什に関する遺趾として「姚秦三藏法師鳩摩羅什之舍利塔」が安置されている。

草堂寺大山門を入り、小山門に向かう参道脇には碑亭があり、『唐故圭峰定慧禪師碑』（唐大中一〇年刻）がある。全長約三・二メートル、幅約一・四メートルで、三六行（毎行六五文字）の碑文は裴休の撰述である。

小山門を経て境内の正面に大殿があり、小山門の左右は碑廊となっている。大殿内の羅什坐像は日本の日蓮宗が一九八二年に寄贈したものであり、そのほか新調された什具が多い。大殿左手から碑廊を外へ出れば、舍利塔亭に至る。大殿背後には仏堂を建立中で、その規模は大殿の数倍になるという。また、日蓮宗も舍利塔亭前の空地に堂宇を建立の予定という。

羅什舍利塔、圭峰禪師碑が唐代の文物であり、碑廊には宋・金・明・清の碑が収められる。その中では、金代重刻

ではあるが「唐太宗贊鳩摩羅什詩碑」、舍利塔亭西側に置かれている元代の「逍遙園大草堂棲禪寺宗派図」が目を引いた。

舍利塔は六角の塔亭内に在り、全高二・三三メートル、八面一二層の大理石製である。素材が大理石のため、それぞれの面・層によつて色が異り、「八宝玉石塔」とも別称されている。基壇はレリーフを施した須弥山座であり、その上に雲台が設けられ、草花文様が雕られている。

龕の部分は八角形で、それぞれの面に仏像などが彫り込まれている。上部は四面の屋根が置かれ、頂上には円珠が蓮華座上に設けられている。舍利塔としては特異な形態を持つと同時に、その作りは精巧である。

同行の陝西省社会科学院歴史研究所の陳景富先生には現地で多くをご教示いただいた。また、先生には『草堂寺』（三秦出版社 一九八九）の労作がある。

漢中八景の中に「草堂の煙霧」も挙げられているが、訪れた日も霧に霞んだ圭峰が趣を添えていた。



慈善寺石窟

とに遡る。慈禪寺石窟もその一環として現在地に開窟された。

永徽四年、薛仁貴は避暑宮であった万年宮（隋の文帝が建立し、名を仁寿宮と称した。唐の太宗はそれを旧に復して九成宮となしたが、高宗は万年宮と改めた。しかしその後、九成宮に再び戻された）の周囲にも仏寺の必要を上奏し、同地の古庄子村に石窟寺院を建立するとともに、滋善寺となした。高宗は避暑に訪れる度、頻繁に当寺を参拝したため、滋善寺の名声は一躍広まつたという。

しかし、開成元年（八三六）文宗の代に漆水河の氾濫により仏舎は倒壊し、石窟が残るのみとなつた。その五年後には武宗による「会昌の破仏」が天下に布告され、長安の仏寺も大半が破壊されたが、滋善寺は皇家の仏寺であり、造形の技巧に優れた石刻として高宗以来の名声に護られて破壊を免れた。

唐末から五代にかけて禪宗が盛んとなると、寺名は滋善寺から慈禪寺へと改められた。解放以前には毎年四月八日には仏誕会が催行され、参拝する信者も多くあつたという。

その沿革は、唐代永徽元年（六五〇）高宗の代に武則天が篤く仏教を敬い、多数の寺院を建立し、石窟を開いたことが記載されている。現在は石窟のみ露出しており、殿楼は存在しない。

西安より西へ約一五〇キロの麟游県にある唐代の石窟寺院。麟游県城より漆水河（杜水）に沿って下ること約三キロの河畔に位置する。石窟の前で河は大きく曲り、その南岸岩壁に三窟が雕られている。現在は石窟のみ露出しており、殿楼は存在しない。

(2) 慈 善 寺

現在は参道の脇に管理小屋があり、農夫が門扉の開閉に

責任を負つてゐるが、ほとんど訪れる人はいない。

一九八二年の修復作業に際しては、殿楼跡より唐代の瓦当が多く出土し、それらが麟游博物館に保管されている。

同博物館に収蔵されている瓦當には全て仏像が刻まれ、建立されていた仏舎の偉容を彷彿とさせる。

現存する窟は、大窟が三窟（一窟は未完成）、周囲に小龕が一四あり、仏・菩薩は三八尊である。その他にも欠損して判別不能の小龕も小数あるという。

正面右手の第一窟が最大窟で、窟高七・二メートル、奥行五・四メートル、その中に三尊を安置する。中央の仏は結跏趺坐の姿で、座高約三・七メートル、左右の坐仏も同様な高さを有す。主尊は釈迦像で、左右は阿弥陀仏と弥勒仏という。窟の内壁には龕が対に雕られ、各一仏が收められる。

左手の第二窟は、窟高五・四メートル、奥行二・二メートルで、内に身丈四・七メートルの阿弥陀如来を收める。

左手に宝珠を持ち、右手は説法印を結ぶ。窟の内壁には火焔紋の光背が雕られ、さらに左右には小龕が雕られていて、右上側の龕には既に仏像はなく空龕となっている。左下側

の龕には一仏二菩薩が收められる。

上記、第一・二窟は保護のため石囲いがなされ、窟前の庭には露柱の台座とおぼしき数点が放置されている。

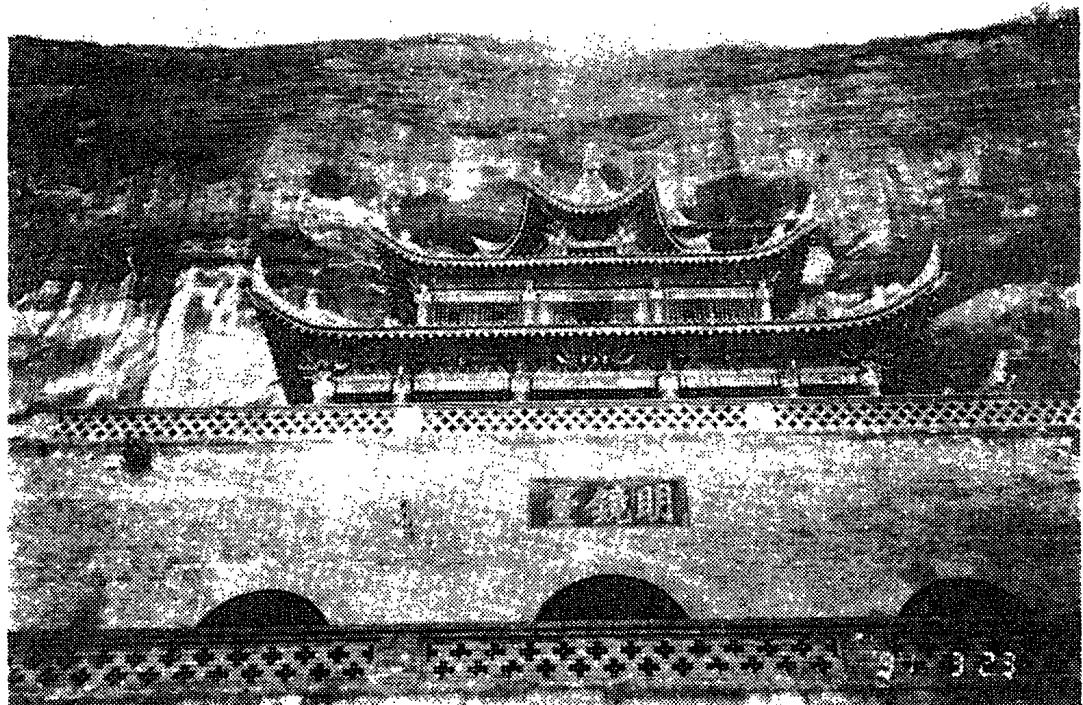
石囲いの外の第三窟には小仏が收められるが、風化して判別は難しい。

そして、石窟から川沿いに三〇メートルほど下流の岩壁には無数の小龕が雕られ、小仏の姿を確認できる龕も多い。前記三窟の上方の岩盤には樓閣の梁を組むための穴が多数残り、石窟は殿楼の内に在つたことを示している。

慈禪寺石窟は一九五七年に陝西省の重点文物に指定され、唐代の仏教研究と仏教美術の研究に不可欠の遺跡と位置付けられている。

また、当寺の付近の山麓には董仲舒の別荘が在つたといふが、所在地の比定はなされていない。

(3) 大 仏 寺



大 仏 寺 殿 樓

り平涼に至る、いわゆるシルクロードのルートでもある。西安から天水を経て蘭州に至る渭河沿いのルートとは蘭州で合流することになるが、両ルートの歴史的な状況は、北のルートである大仏寺を経由する涇河沿いの道は副道として利用されていたと考えられる。それは、平涼から蘭州へは向かわず、寧夏回族自治区の固原に至り、さらに清水河に沿って中寧から武威に向かう道にも通じているところから、政治的・社会的状況に応じて幾本ものルートが設定されていていたといえる。例えば、法顯は鳳翔から靖遠へ抜けているのに対し、玄奘は密出国ではあるものの、渭水沿いで秦安を経由して蘭州に出ているごとくである。

大仏寺は涇河沿いに点在する石窟群の中では最も西安に近く、西域への入口に位置するといつてもよい。涇川の南・北石窟寺、慶陽石窟、固原の須弥川石窟へと連なる最初の石窟寺である。

大仏寺は貞觀二年（六二八）に尉遲敬德により創建され、石窟は七六〇年頃に開窟されたといわれるから、当初は本尊としての大仏窟と殿楼のみであり、千仏・羅漢の両洞はなかったことになる。寺前の道路下は涇河の河川敷であり、

河岸の岩山を穿つて大仏殿は建立されている。道路脇の大仏寺文物管理所から殿楼へ昇れば、正面右に羅漢洞、左に千仏洞が位置し、両窟内とも多数の仏・菩薩・神将・天人などが雕られている。羅漢洞は四窟構成であり、千仏洞は三窟により成立している。両窟の諸像とも破仏の影響を受けて、頭部ほかいすれかの部位を欠いている。千仏洞右には大仏寺を造営した尉遲敬徳を祀る「鄂公生祠」が位置する。

「明鏡台」の額が掲げられた中央の大仏殿は四層構造となつており、基壇からは大仏の座面に入ることができる。二層には羅漢・千仏両洞、三層では大仏の顔正面を押し、四層では頭上から見下すことができる。大仏（阿弥陀仏）の顔は涇河に向けられ、胸前に上げた右手の薬指は第二関節から僅かに前に曲げられて、涇河の水を鎮めているといわれる。

大仏窟は幅・高さとも約三〇メートルあり、奥行きも最深部では二五メートルに及ぶ半円形となつていて、一仏二菩薩の形態を探り、大仏は高さ約二四メートルに及ぶ。右に観音菩薩、左に勢至菩薩を配し、周辺の壁面には坐仏・飛天を多数配してある。大仏の後背（左肩部）には造像記

が刻まれている。

大仏も会昌の破仏により一部が破壊されて修復され、その結果泥塑となつていて、しかし、大仏像の全身は豊満で面相は威厳に満ちており、唐代の特質をよく残している。

当寺の造営を指揮した尉遲敬徳の存在が、この大仏と西域を結んでいる。

于闐王室は自らを毗沙門天の末裔と称し、ヴィシャ（毘沙）の音訛である「尉遲」をその姓として用いた。敬徳の出身は朔州善陽と記されるが、その家系は西域于闐に繫ながつていて、敬徳は武人として知られ、唐建国の功労者の一人として右武侯大將軍、並びに吳國公を貞觀元年に賜っている。その翌年に大仏寺は開創され、敬徳は故国へ通じる道に大仏寺を創った。さらに、後出の悟真寺修築にも帝の信任厚いこの功臣は携わっている。

また、敬徳と仏教の結び付きは意外なところにもあり、後に玄奘の高弟として『成唯識論』を訳出し、法相宗の始祖となつた慈恩大師窺基の叔父にあたるのである。

窺基の家系は、後魏の平東將軍尉遲説に始まり、その後中國に定住したため窺基の出身は長安と記されるのである。



昭仁寺山門より境内を望む

『宋高僧伝』卷第四「唐京兆大慈恩寺窺基伝」、『旧唐書』六八（『新唐書』では八九）の敬徳伝に詳しい。

(4) 昭仁寺

西安より北西に涇河沿いを進み、彬県を過ぎて前出の大仏寺を経由した長武県の城内に位置する。

開創年代は不明であるが、一説には北魏太和年間以前の創建といわれる慈福寺を、貞觀二年（六二八）に唐の太宗李世民が改めて昭仁寺となしたと伝えられる。

太宗と昭仁寺の結び付きは、薛舉と薛仁果親子の挙兵に遡る。薛仁果は隋末の群雄の一人と称され、河東汾陰（山西省万榮県）の出身である。祖父の薛汪のとき金城（蘭州市）に本拠地を移して一帯に割拠したが、大業一三年（六一七）に父薛舉とともに挙兵して隴西一帯を占拠し、奏国と称して父は秦帝、自らは皇太子となつた。奏国東道行軍元帥として各地を転戦し、秦州（天水市）を陥として寧州を囲んだ。薛舉の没後、析壠城（甘肃省涇川県）で即位（六一八）したが、性格が殘忍であり配下の諸将と対立し、唐に降る者が続出したという。太宗とは高壠（陝西省邠県）で対峙したが、糧食の尽きることにより敗れ、投降したがその年に長安で斬られた。旧唐書五五、薛舉伝（新唐書八六）によれば上記のごとく太宗と薛舉、薛仁果の争いを記すが、実際には太宗の敗北（六一七）があり、翌年にやつと内訌に乗じて鎮圧したのである。薛軍を侮った太宗は將兵の半数を失う敗北を喫し、持久戦となつた二度目の戦闘で勝利したのである。

そして、この一連の戦いに敗れた將兵の慰靈のため当寺を再建したのである。

過去における昭仁寺の規模は推測するしかないが、出土品の分布状況からみて宏大な寺域を有していたといわれる。現在の同寺は寺域極端に狭く、伽藍も大雄宝殿、碑亭、山門の他は、管理所と出土品などの収蔵庫に使われている房舎が一棟残るのみである。

山門の扁額に「昭仁寺」とあり、碑亭には虞世南筆、朱子奢撰になる唐碑「幽州昭仁寺碑」が、螭首を備え龜座に乗っている。

また、大雄宝殿の建築様式は非常に特殊な方法で、「一座九梁十八担」と呼称されて知られる。この工法は、堂内に柱を立てなくともよいよう、周囲の梁を基点として天秤棒のように均衡を保つて屋根を支える方法である。俗に「八卦懸頂方式」とも称されるが、この構造のため堂内は正方形で比較的狭い。

当寺の起源は、隋代に創建された（隋文帝の開皇年中、五八二—六〇〇）悟真寺に属する水陸殿にあるといわれる。『続高僧伝』卷第十二の「隋終南山悟真寺釈淨業伝五」には、開皇年中に藍田の覆車山に遊んだ淨業は、終焉の地をここと定め、その志を知った信者が俊厳な山中に山房を築いたと記し、それが悟真寺であると記す。

堂内は県の歴史をパネルで示した展示室となつており、仏像その他仏教に関するものは全く存在しない。収蔵庫入口に長武県博物館の名があつたが、専門的調査はなされていないようで、北魏から唐にかけての石仏・供養塔・千仏塔から、時代不明の仏頭までが無難作に置いてある。庫内

で自由に調査できたのは望外の収穫であった。

当寺は会昌の破仏による彈圧と、文革の迫害を被り、大雄殿と唐碑を除いて重要な文物の大部分を喪つたという。

(5) 水陸庵



水陸庵全景

り、僧千人を擁する淨土教の一大聖地となつた。その盛況な様は、白樂天の「游悟真寺」の詩中にも語られている。

宋代になつて一時、崇法寺と改められ、ほどなく旧名に復したが、その後漸次衰退した。明代になつて名仏師の乔仲超が堂内に大塑像群を作ることで再び脚光を浴びた。現代ではそれを称して第二の敦煌という人もある。明嘉靖二年から隆慶元年（一五六三—一五六八）の六年間にわたり三千七百余体の仏・菩薩・神像等が作り上げられたが、その内容により八群に分類されている。

第一群は堂内正面に位置する。中央に釈迦牟尼仏、右に東方瑠璃光世界の藥師如来、左に西天淨土の阿弥陀如来を配し、それぞれに弟子、菩薩が付されている。

第二群は報・応・化の三身仏を中心とした構成であり、第三群は善財童子五十三参、第四群は地蔵菩薩を中心とした菩薩変のグループであり、その中には薬王孫思邈の薬王菩薩変も含まれている。第五群は五百羅漢渡海、第六群は三界と二十四天を表し、第七群は本生譚により構成され、第八群は兜率天がモチーフとなつていて、須弥壇を中心にして堂内を一巡することで膨大な仏像を拝することになる。



豊徳寺仏殿

当寺は幸いにして文革の破壊を免れ、時間の経過による破損と変色以外に著しい被害はない。

本来の目的である悟真寺は、水陸庵より山を越えた所にあり、通じる道もない山中ということで調査は次の機会に行うこととなつた。

(6) 豊徳寺

西安の南約三〇キロに在り、長安県灋谷の入口に位置し、終南山豊（灋）徳寺と称することもある。終南山とは翠華山・圭峰山・驪山・南五台山等を包括した名称で、秦嶺山脈の西端にあたる。豊徳寺は南五台山の西にあたり、寧陝へ抜ける道路脇に参道が設けられている。参道脇は採石場となつており、多くの車輛・労働者は行き交うものの、豊徳寺へ登る者はいない。参道とは名ばかりの山道を暫く登ると台状の平地があり、土壁を巡らせた民家と見紛う程の伽藍が現れる。山門前に立てば西の谷間の彼方は草堂寺方向である。当寺及び淨業寺はともに南山律宗の祖庭と称されている。

寺の創建は唐高宗の代、永徽年間（六五〇—六五五）と

寺院遺蹟についての調査報告（佐藤）

いわれるが詳細は不明である。豊徳寺には長安陟岵寺に住した智藏ほか、『続高僧伝』を著した道宣、玄奘の弟子円測が住した。寺内には會て道宣の建立した戒壇、円測の舍利塔があつたという。智藏が隋文帝の開皇三年（五八三）に当寺に住し、唐武徳八年（六二五）に八五歳で寂したと『続高僧伝』は記すところから、当寺の創建を隋代とし、唐代に重建或いは重修とする説もある。また、道宣が当寺に住したのは貞觀一六年（六四二）より三年間であり、貞

觀十九年に玄奘が帰国して訳經事業にとりかかると召されて長安弘福寺に参じたのである。

山門入口脇の地面には清乾隆五八年の重修碑、および光緒一九年の重修碑が無残に放置されていた。両碑ともいた

る所が欠損し、後者は一度コンクリートで碑文を塗り固めたようだ、年号そのほか数行を読める程度である。比較的破損を免れた前者も、文字を一字づつ整で突いた跡があり、やはり全文を読むことはできない。いずれも文革時の破壊というが、未だに寺域の整備も儘ならぬ状態という。

現在当寺には約二〇名の尼僧が自給自足に近い修行生活を続けており、いすれば鼓樓、大仏殿の復興をなし伽藍を

旧に復すのが責務と住持の妙覺法師は語った。一九八六年に淨財を募って房舎を建てるなど計画は進捗しつつあるといふ。

漢中の一大古刹といわれた面影はないが、黙然と土を耕すなどの作務に従事する尼僧の修行態度には、規矩を遵守して再び仏法を興さんとする氣概が感じられる。

(7) 興教寺

西安の南約二〇キロの長安県杜曲の東、少陵原の半坡に位置する。いわゆる樊川盆地内にあり、樊川八寺（興教・華嚴・雲栖・禪定・洪福・觀音・牛頭・興國）の一寺である。

唐高宗の麟德元年（六六四）に玄奘は寂し、西安東郊の灞河東岸、白鹿原に葬られたが、總章二年（六六九）に少陵原に移され、伽藍と塔が建立された。その後、肅宗により「興教」の二字を賜り、それを寺名となすに至った。当寺の西の庭に建つ三基の塔は、北側の高さ約二〇メートルの塔が玄奘の墓塔（唐三藏塔）であり、その南側の東西に円測（測師塔）と窺基（基師塔）が陪葬されている。慈恩

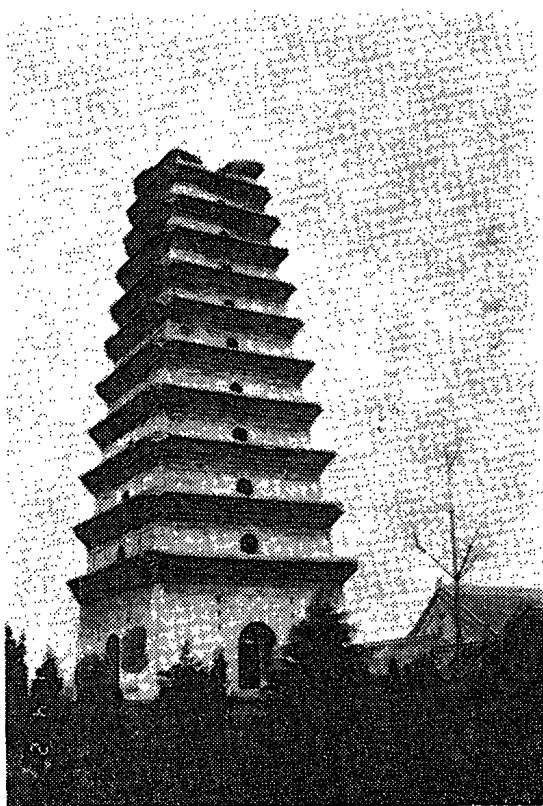


興教寺山門

大師基は入寂後直ちに玄奘塔横に葬られたが、円測は竜門香山寺に葬られて後、先に記した終南山豊徳寺に分骨され、さらに豊徳寺より分骨したのが当寺の測師塔である。

伽藍は清の同治年間に荒廃したが、近代に修築されたものである。

山門からの眺望は南に大きく開け、遙かに終南山の山系を霞の彼方に観ることができる。



香積寺崇靈塔

(8) 香積寺

西安の南約一八キロの長安県葦曲鎮の西南、神禾原の香積村に位置する。

寺塔は唐中宗の神龍二年（七〇六）に、中国浄土宗の大成者である善導を祀るために高足の懷惲が一三層の大塔を崇靈塔として創建したもので、香積寺は淨土宗発生の地と称される。建立された当時の墓塔は壮大なもので、王維の詩「遊香積寺」にも記されている。

塔入口の額には「涅槃盛事」の文字（清乾隆年間）が残されている。

現在の香積寺は伽藍も整備され住僧も多く、行事も規矩に従つて行われている。訪れた時も午後の念佛が二〇名程の僧侶により厳修されていた。